
最後の対決

ヒグレカネキチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の対決

【Nコード】

N1056I

【作者名】

ヒグレカネキチ

【あらすじ】

神の力を持った二人の戦いの行方は？

最後の対決

それは、蒸し暑い夜の事だった。

奴と俺の因縁の対決が始まるうとしていた。

この勝負に勝てば念願の物が手に入る、何としても勝たなければ・
・
思えば、こいつとは何かにつけて勝負してきた。今までの勝敗は5分と5分、勝ったり負けたりしている。思い起こせば10年程前から、

こいつとの勝負が始まった。その頃の奴は初心者で攻撃パターンが見え見えだった。

いつも俺の予想通りの攻撃をしてきていたのだ。その頃の俺は連戦連勝だったが、いつの間にか奴も力を付けてきていた。引き分けが10回以上続いた時は、流石に俺も疲れ果てた。

俺が奴の攻撃で一番注意しているのが、奴の拳が少し遅れて出て来る時の攻撃だ、ほんの、零コンマ何秒の時間差攻撃なのだが、その一瞬の時間差の中で俺の攻撃を見抜き奴は攻撃してくる。レフリーもその鮮やかな反則攻撃

を見逃さないように注意深く俺達の戦いを
見ている。

今日の戦いはいつになく熱い戦いになりそうだ。観客達も固唾を飲んで俺達の戦いを見ている。急に俺は3日前の流血戦を思い出してしまった。あの時の優勝商品が俺にはどうしても手に入れたかった。それは奴も同じだったが俺にはどうしても手に入れなければならぬ理由があつたのだ。

その理由と言うのは、俺が趣味で集めている物でどうしても手に入らないレア物が商品だったのだ。それさえ手に入れば俺のコレクションは完璧になる。それを完成させるために

その時の勝負はいつになく力が入っていたのだ。しかしそれは奴も同じだった。偶然にも奴も俺と同じ趣味でそのレア物商品を狙っていたのだ。そして対決が始まった。奴も俺も全身全霊をかけて勝負をした。しかし中々、

勝負が付かない、コンマ何秒の拳と拳の戦いが続いて行った。何回目の攻撃だっただろう

奴と俺の拳が激しく衝突した、その瞬間激しい爆発が起こったかのように俺の目の前が光に包まれた。気が付くと奴と俺の拳から鮮血が滴り落ちていた。その時はレフリーストップが掛かりそれぞれのコーナーに戻り手当てをしてまた試合が再開された。しかし勝負は中々つかなかった。そして終了ゴング間近の時に俺は必殺技を出した。両手をねじりながら前に出し手の平を合わせた。

そしてそのまま両腕の間に通しその組んだままの手を顔の前に持つて来てその合わせた手の平の中を右目で覗いた瞬間に奴に平手をくらわした・・・

俺は勝った。奴はガクツと倒れ込んだ。

そして俺は念願のその商品を手に入れたのだった。奴は潤んだ目で俺を睨みつけていた。

そんな事を思い出している内に試合時間は着々と近づいていた。ふとあの時奴の拳と衝突した時の傷跡が目に入った。やっと傷も癒えてきていたが完全に治らないうちにまた、今日の試合を迎えたのだ。今日の俺は奴に負ける気はしなかった、「今日はお前を完膚なきまで叩きのめす」と奴に行った。「その言葉そっくり返すぜ」と奴は言ったが、今の俺は

心も身体も今までにないくらいに充実していた。奴に負ける気など少しも無かったのだ。

試合を見守っている俺達のファンも息を殺して俺達の試合を見守っていた。

対決の時間になった。

レフリーも一撃必殺の瞬間を見逃さないように全神経を俺達に向けている。

レフリーの合図で試合が始まった。

俺は電光石火のごとく奴に拳を振りおろした。

奴も負けずに俺に向かって拳を振りおろした。

合い打ちになった。俺達はその衝撃に耐えられずに拳をもう片方の手でかばった。

奴は、確実に力を付けていた、スピードも

今の俺と互角もしくはそれ以上かもしれない、ついこの間まで俺の後を追いかけていたのに、俺に負けまいとする執念がこいつに

どんな修行をさせていたのだろうか。

しかし、俺もこの勝負だけは負けられない。

兄弟子としての面子に掛けて絶対に負けられないのだ！同じ師匠を持つ俺達の最後の決戦。

師匠もどんな気持ちで俺達の戦いを見ているのだろうか、その師匠の気持ちを思うと俺は

涙が出て来そうになった、ふと奴の顔を見ると奴の目に光る物が流れていた。奴も俺と

同じ想いでこの勝負に挑んでいるのだ。

師匠には悪いが兄弟子として絶対に負けられない、そんな俺に弟弟子は必死に食らいついてくる。

二回戦が始まった。俺はこの日の為に必殺技をあみだしていた、ここでそれを使う事になるとは・・・しかし今の奴には情けは無用、

奴の為にも上には上がいる事を教えなければ、それが兄弟子の務め
・
・

俺は容赦なく奴に必殺技を浴びせた。

両手を高く上にあげた、そして両腕を思いっきり擦じり手の平を合わせた。そしてそのまま両腕の間に合わせた拳を通して顔の前に下ろした瞬間に奴に眼つぶし攻撃の人差し指と

中指でVの字を作り奴の目の前に繰り出した。

すると奴はそれを避けようと平手で俺の手を払ったのだ、勝負は一瞬で片が付いた。

レフリーの手が俺に上がった。俺のスクリューゴッドハンドが勝つたのだ。

奴の額から汗が滴り落ちている。今の俺の攻撃に恐れをなしたようだ、しかし勝負は後2勝しなければならぬ。俺は情けを捨てて次の勝負に挑んだ。奴も俺に対してすべての力を使って挑んでくるようだ。

レフリーの試合開始の合図がくだった。

俺は、奴には可哀相だがまたスクリューゴッドハンドを使ってしまった。すると奴は叫んだ「同じ手は2度と通用しない、今度は俺のスーパーハリケーンハンドを受けて見ろ」

と言いながらいきなり右の拳を左手で覆いながら後ろを向いた、その瞬間平手が俺の前に現れたのだ、俺のゴッドハンドは拳で奴の顔を捉えていたのだが、レフリーの勝者への

右手は奴に上がった。俺は「まさか、俺のスクリューゴッドハンドが破られるとは」と今の衝撃でしびれている右手を抑えた。

「ここまで奴が強くなっているとは」

俺は奴の底知れぬ力に驚きを覚えた。しかし

この勝負は負けられない、今の所1勝1敗

先した後2勝した方が優勝だ。すぐにレフリーの試合開始の合図が降りた、そして今度は、

フルスピードで平手打ちを奴に見舞わしたのだ、奴の拳は悲鳴をあげて砕け散って行った。

レフリーの手が俺にあがった。残り後1勝！

「許せ、弟子よ」と心の中で泣いていた。奴はもう使えなくなつた右腕をかばいながら、左手を使ってきた。

そして、これが最後の勝負、「これで終わりにしてやるからな、楽にしてやるからな」と心の中で奴に泣き叫んでいた。

そして最後の勝負、俺はハイパースクリューゴッドハンドの拳を奴

に使ってしまった。

奴の左手の人差し指と中指のV字眼つぶし攻撃はあっけなく砕け散って行った……

俺は勝った、今までに無い死闘を奴と出来た事に俺は神に感謝した。奴は燃え尽きたかのように只呆然と優勝賞品を見つめていた。

長かった死闘もこれですべて終わったのだ。

レフリーが優勝賞品を俺に渡して微笑みながら言った。

「和も聡史も、そんなにこの苺のショートケーキがいいの？このモンブランじゃ嫌なの？」とレフリー兼俺達の母ちゃんが言った。

俺は「どうしても苺が良いんだ」と言う

弟が「いっつもお兄ちゃんばかり好きなの食べてずるいよー」と言って泣き出してしまった。俺達にジャンケンの面白さを教えた

師匠またの名を俺達の父ちゃんが口を開いた。

「和、お前お兄ちゃんなんだから聡史に今回は苺のショートケーキあげなさい」と言った瞬間弟がそれを凄い勢いで食べてしまった。

俺は弟を睨みつけながらしぶしぶ残ったモンブランを食べたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1056i/>

最後の対決

2010年12月13日17時45分発行